

よ な か た

目次

7	新型コロナウイルス
7	若布献上
6	宗像大社春季大祭
5	沖ノ島祭祀
4	神宝館だより・みどころ
3	宗像大社歌会詠草
2	御造営奉賛者御芳名

7 7 6 5 4 3 2

よしも・COVID-19と名付けられた新型コロナウイルス。全世界で猛威を振るい、世界中で一九〇万人以上の人が発病し未だ増え続けている。四月七日の緊急事態宣言発令に伴い、当社では神宝館の休館、こまめな換気と消毒、除菌スプレ어의設置などの対策を行い、毎朝の日供祭に併せて疫病鎮静祈願祭を齎行している▼この緊急事態に、大なり小なり人間社会は右往左往している。しかし自然界に目を向けると、桜が咲き、四月の中頃には葉桜になっている。ツツジは蕾が膨らみ、花が咲き誇る準備が始まっている。人の営みに関係なく季節はいつも通り巡っている▼神道は古来より自然を畏怖し祈りを捧げてきた。疫病も恐ろしい自然の一つであり、各地に疫病鎮静の祈りが込められた祭典、神事が伝わっている。神職として日々の祈りを大切に一日でも早く事態が終息し、日常が戻る様に祈念したい。(日)

新型コロナウイルス

― 疫病と日本人

世界で猛威を奮う新型コロナウイルス。そもそも神社では疫病に関する祭りが沢山存在する。地元福岡では櫛田神社の博多祇園山笠が有名であるが、このような祭りを現在まで引き継いでいるのは、先人たちが決して忘れてはならないと考えた記憶の伝承でもある。

疫病の祭りを子細に見ていくと、日本人は疫病と対立するのではなく、疫病を鎮めることによって、自然との関わりをはじめ、何故こうなったのかを自問自答するなど、極めて謙虚な姿勢であることがわかる。

疫病には今も昔も社会の混乱、特に治安の乱れは細心の注意がなされている。先行きの見えない不安感が続くと、誰しも心身ともに疲れ果てて冷静さを欠く、日本人は世界の中心でも比較的、社会性の高い民族とされるが、それでも乱れる時は、乱れてしまう。

近年、高度成長期にトイレットペーパーがなくなるといふ噂が流れ、人々が店に殺到し

て奪い合うなどのことがあった。この原因は疫病ではないが、個々の心配が高まって社会全体が不安になり、日本全体がパニック状態に陥ってしまった。今回もコロナを巡って、海外では殴り合いのような報道が複数なされていて、人間の弱い面が露呈している。

どんな時であっても平常心を保つことは難しいことではあるが、疫病の歴史を振り返ってみると、日本人は様々な祈りを捧げ、自ら自問自答することによって、心の安定を保ち続けている。

コロナに打ち勝つやウイルスとの戦争など、巷では過激な表現がなされているが、コロナを対立軸にするような考え方は、決して日本的なものではない。特效薬やワクチンの技術も待たれるところではあるが、現実を受け入れるためにも、過去の先人たちの疫病に対する謙虚な姿勢に学ぶべきではないだろうか。

宗像では隣国の経済活動が停止し、空も海も美しく輝き、本土から神の島「沖ノ島」が見える日も多くなっている。新緑の木々もいつもより青々としていて、野鳥が飛び交い自然が

生き生きしている。時間に追われる日々が続き、都会の人々は自然をじっくり見ることもなかったと思うが、公開された衛星写真からも、それぞれの地域や国々の自然の表情が今までと違うことだろう。

私たちは、経済という名のもとに大量生産大量消費を繰り返し、経済の豊かさが人の豊かさとしてきたが、今回のコロナにより改めてモノの豊かさ、心の豊かさについて、大きな反省をさせられるのではないか。あらゆる自然には神々が宿るといふ原点に立ち返り、コロナと自然を考えることも一考ではないか。

コロナの前線に立たれている医師や看護師、医療関係者には最大の敬意を払いながらも、私たち自身も何故このようになったのかを自問自答し、それぞれが本心に豊かな社会の姿を考えるべき時ではないだろうか。

科学や技術がいくら進歩しても人々の心理は、今も昔も変わることはない。特に非常時における心理は、歴史から学ぶことが多い。心の安定を保つためにも、疫病と日本人について、あらためて見つめ直しては如何か。

沖ノ島祭祀

18

疫病の蔓延と神輿・祭礼

國學院大學

神道文化学部教授

笹生衛

令和二年、新型コロナウイルスの蔓延により人類は大きな危機を迎え、社会生活は根底から変化した。しかし、それは今回が初めてではない。人類は過去の歴史の中で、度々、疫病の蔓延を経験し、多くの犠牲者を出してきた。これは古代の日本においても同様であった。天平七年(七三五)に九州の大宰府管内から広まった瘡瘡(天然痘)は、天平九年にかけて列島内に蔓延し、当時の政権中枢にいた左大臣の藤原武智麻呂をはじめ多くの人々の命を奪ったことは著名である。

時代の歴史書『日本紀略』によると、正暦四・五年(九九三・九九四)、平安京で疫病が流行した。正暦四年の五・六月は咳疫がはやり、七・八月には「瘡瘡の患」があったという。咳疫はインフルエンザに当たると、疫病に対処するため大赦や賑恤が行われた。賑恤とは、老人や困窮者などへ食料・物資を、朝廷(政府)が支給する救済策である。四・五月には疫病を鎮めるため、大祓と諸社への奉幣が度々行なわれた。また、「左京三条油小路の井戸の水を飲む人は疾病を免れる」との噂が流れ京中の人々は殺到し、一方で妖言のため公卿から庶民までが門戸を閉じ家に籠ったという。現代と同様、社会不安が平安京内には広がり、混乱状態となっていたのである。

このような状況の正暦五年六月二十七日、都の北、船岡山で御霊会が行われた。目に見えない存在により多くの人々の命が次々に奪われていく。その様子を目の当たりにした当時の人々は、疫病の原因を「疫神」の働きと考え、これを鎮めるため、御霊会を行った。神輿を作り「都人士女」(平安京の都市民)は衆人を招き音楽を奏し、多数の捧げものを持ち寄り供えて疫神を祀った。そして疫神は神輿で難波の海まで送られた。

この御霊会は朝廷が行ったのではなく、平安京の都市民・民衆により実施されたことに大きな意味があった。ここが一つの画期となり、不特定多数の人々が自由に参加し観覧する民衆の「祭礼」が成立したのである。この後、神が移動するための「神輿」、これに神を楽しませる音楽「神楽」が伴

う「神幸祭」の形が整えられ、現代に伝わる祇園御霊会(祇園祭)など都ぶりの祭りへとつながっていく。疫病の蔓延は、社会を変化させるとともに、新たな祭りの形を作っていたのである。



祇園御霊会の神輿と神楽・獅子「年中行事絵巻」(旧岡田本)(國學院大學博物館蔵)